

子育て中の女性アーティストに関する実態調査

研究責任者：高橋律子（NPO ひいなアクション）

子育て中の女性アーティストは、仕事をしながら子育てをして、作品制作は子どもが寝た夜中や早朝に限られてしまっている。また遠方での展覧会出展も子どもを置いて行きづらく、作品発表の機会を逃しがちになっている。本調査では、こうした子育て中の女性アーティストの実態を主にアンケート調査によって明らかにした。

調査対象の選定：「アーティスト」が誰かを特定することが難しいため、アンケートの対象者を選別するのではなく、自分自身がアーティストだと考える方に回答していただくこととした。また、「子育て中」という基準もあえてもうけなかった。アンケートを行う中で、逆に「子育て中」という実感のある年齢層がみえてくるのではないかと考えた。

調査方法：Google フォームでアンケートを作成し、FaceBook 等 SNS を活用し、該当者である「子育て中のアーティスト」に広く呼びかけ、回答していただいた。結果、12月14日から24日まで11日間の調査期間に53名の方に回答いただくことができた。

設問設定：設問としては、回答者自身についての質問、出産後の制作環境の変化、制作時間の捻出方法、生活における創作活動の比重、地域における活動の場の有無、作品制作に必要な条件、子育て後の活動の展開について、について問う11問と、最後に自由記入欄を設けた。

調査結果分析：

調査データの詳細については、別表を参照いただきたい。ここでは調査結果の概要を記しておく。

まず海外3件を含め、全国から回答いただくことができた。また、調査実施前は「美術系」のみしか想定できていなかったが、結果として劇作家やメイクアップアーティスト、声楽家、書道家、映画監督、アニメーション制作、身体パフォーマンスなど、想像を超える多様なジャンルの人に回答いただいた。作品のジャンルや、親が近くにいるかいないかなど、それぞれの事情により状況もかなり異なるものの、共通する課題も見えてきた。そして、地域に活動場所を設けることがサポートになると考えていたが、回答者の多くが、自ら地域で活動できる場づくりに関わっており、課題はそれ以上に、アーティスト活動をどう収入に結びつけていくかにあることも明らかとなった。

自由記述とした最後の設問に、8割以上の方の記入があり、回答者が積極的にアンケート調査に取り組んでくれたことがわかる。それは課題がそれだけ切実だということであるからだと思われる。子育てという生活と芸術作品を制作するという精神面での切り替えが難しいと書いた人が複数いた。細切れの時間では制作できない理由がそこにあるだろう。将来的には海外等でレジデンスに参加したいという声も多かったということは、現状、やはり遠方で長期の活動は制限されていることを意味している。子どもがいても長期滞在型のプロジェクトに参加できるようなサポート体制が作っていきたいと考えている。

一方、子育ての経験がアーティストの活動のモチベーションとなることや、コミュニティとの関わりができることをプラスにとらえる意見もあった。また男性と女性など分けて考えることに疑問を感じる声もあった。だが、きめ細やかにそれぞれの立場における課題を明らかにしていくことこそが、課題を解決していく第一歩であると考えている。この調査をもとに、子育てをするアーティストたちが作品制作を継続できる環境づくりができるよう、さらに努力していきたい。